

PRESS COLLECTIVE

— AUTUMN 2018 —

collective vol.45

22th September 2018

@event space 雲州堂



http://collective-music.com/

edit: tawaki text: tawaki, 楠田行展, kengomatsui, yu design: yukiokimura.com special thanks: Donald & Fagen

Donald & Fagen (Broken Radio)

インタビュー

今回のゲストである奈良市在住のラジオユニット Donald (ドナルド) & Fagen (フエイゲン) の音楽遍歴と活動内容を猿沢池のほとりにある小料理屋「旬菜香音」で尋ねました。

—お二人が音楽に深入りするきっかけは？

Fagen (以下F) …本格的に聴き始めるようになるのは中学生の頃。当時ガチャガチャしたロックは苦手でした。アーバンな音楽が好きで角松敏生に惹かれてファンクラブに入っていました(笑)。当時はこっそりと角松を聴いていたので、昨今の再評価は狐につままれたような感じですね。自分は男性のシンガーソングライターを熱心にチェックしていて、同時期に徳永英明なんかも聴いていたんですが、子供心に「やっぱり角松とは違うな」と感じて取っていましたね。

—「モノが違うな」と(笑)。

F…角松を追っかけていたらブルックミュージックが好きになっていましたね。角松音源をコンプリートしようと思ったらまずレコードに手が伸びていったんです。それで高校生の頃に入り浸っていたのが布施にある「Zappa」というレコ屋。ここでドアーズ、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのような定番のオールドロックも好きになりました。大学の頃にはアーロンレコードのアメリカ買い付けに同伴したこと

もあって、やらにいろんなジャンルに触れるようになりましたね。

—ではドナルドさんは？

Donald (以下D) …高校生の時にWARPからリリースされたインテリジェント・テクノなんかハマり始めて、その後バンド・サウンドを聴きたいと思って、当時奈良で繁盛していたDANGOというレコ屋でアズテック・カメラやヴェルヴェット・クラッシュに出会いました。それでネオアコやギターポップにハマり始めた。その後はバンドをやったり宅録を始めたり。小山田圭吾がパーソナリティを務めるFM番組「ラプオーバertime」にデモを送って流してもらったりしたこともあります。

—ドナルドさんは「FANHOUSE」というパーティでDJ(AZUMA名義)もしていますよね？

D…ソフトロック、サイケロック、クラウトロック、音響系なんかを聴いていて、30前ぐらいで「聴くものない」となって、宅録するようになってメンバー募集したけど誰も来なかった。で、結局一人でできるDJが楽やなって(笑)。バンドマン気質だったから、もともとDJはあんまり好きじゃなかったんだけど。

—お二人の出会い？

F…僕がJR奈良駅の近くの「浮遊代理店」というギャラリー／カフェによく出入りしていたんですが、そのマネージャーが「音楽好きの人がいる」と紹介してくれたのがドナルドなんです。実際に会ってみるとラジオが共通の趣味だと分かって。それで「ラジオをやってみ

たい」と提案したところ「やりましょう!」となって。ドナルドはバンド経験があるので録音のノウハウがあるし、機材も持っていたから行動に移すまで早かったです。

—2014年からBroken Radioを始め、月に1回ぐらいのペースで収録・配信しているのはすごいエネルギーですね。

D…自分たちが好きでやっていることだから、どっちかが「やめよ」と言った時点で終わるもの。でも継続していることが大事なあとと思って。Podcastで楽曲を流すのは、著作権上の問題があるので、スタジオで収録している時には曲をかけているんだけど、配信しているのは喋りだけです。

—音楽から時事まで幅広いですが、ネタを決める基準は？

F…めっちゃふわっと決めていきますよね。音楽ネタだけで貫くのは限界があるし、そもそもAMラジオへの憧れがあるから、単に喋りたい。あと残したいという欲求もあります。これは必要なエゴやと思っています。残したもん勝ちやな(笑)。

D…収録日を決めたら、1週間の出来事なんかをニュースでチェックしたりするんだけど、「特徴的な人とか出てこないかな」と期待しているところもあり(笑)。

F…Podcastのダウンロード数をチェックすることもあるけど、結局僕たちが楽しくないと続かない。一番のリスナーは自分やと思う(笑)。少し色気を出して、角松敏生をタイトルに入れたりすると普段よりダウ

ンロード数が伸びたりしますけどね。

—風営法やLGBTを扱った回もありましたが、声高に主張するわけでもないスタンスですね。

D…扱っているテーマについて詳しくないこともありますからね。Broken Radioの決まり文句が「見守るしかない」。2回に1回は言ってますね(笑)。

—Broken Radioを聴いているとお二人が心底音楽好きなのがわかります。ホームページの丁寧な作りも素晴らしいので是非多くの方にチェックしてもらいたいです。コレクティブの14年の歴史でラジオスタイルのブレイをしていたくのは初めての試みなので楽しみです。

D&F…こちらこそ楽しみにしています。ちなみに最新の配信(第73回)は、collectiveの楠田さんをフィーチャーしているので、是非聴いて欲しいですね。

Broken Radio

http://brokenradio.shop.jp



左端がFagen その隣がDonald (@小料理屋「旬菜香音」)

(インタビュー)楠田行展、tawaki)

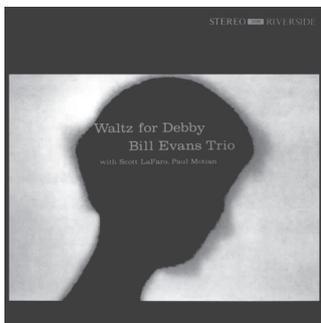
14年目の夜に

Kengo Matsui

現在の時刻は、22時27分。この原稿は、泣いて寝ない赤ちゃん(次女・0歳5ヶ月)を抱きかかえながら、ふと訪れる皿の時間に、親指一本でiPhoneのメモに書いている。締切まで残り2日。パソコンに向かう時間は取れそうになり、指先の赴くままに書く。

まだ、食器洗いの残り、洗濯物干し、風呂掃除、麦茶沸かしが残っているが、それをこなす体力と精神力が残るだろうか。赤ちゃんの泣きは本当に精神を削る。週末からぎっくり腰5秒前といった腰痛だが、立ち上がって抱っこしていないと泣く…。

赤ちゃんを寝かすため、部屋の電気は暗くしているが、それが一層つんざりた気分になる。せめてもの慰めに、iPhoneのスピーカーからビル・エヴァンスの、ジャズ史に輝く「Waltz for Debby」を流している。精神的に削られた状況では、iPhoneのスピーカー



Waltz for Debby / Bill Evans (Riverside Record (1961))

で小さな音で鳴らすくらいがいい。音楽のサブスクリプションサービスは是非という話はよくあるが、自分にとっては圧倒的に、もはや音楽とつながる最後の命綱ともいったところだ。レコードショップやクラブへ行くことは、いまの僕から見れば王侯貴族の世界の出来事だ。

そんな中でも音楽への気持ちは消えることはなく、いまも虎視眈々と復活の時を狙っている。その時まで錆びつかないように、ほふく前進で、腕を磨き続けている。アルバム制作は続く、こんな生活のためか、自分の作る音楽も、高揚ではなく、鎮静を目指すようなクールな音楽を志向している。かと言ってアンビエントではなく、グルーヴがある、しかし係留するようなグルーヴ。例えば「Kind of Blue」のよこな、という大層かもしれないけれど。皆様、今日もcollectiveにお越しただきましてありがとうございます。2004年に始まったcollectiveも、この夏で14周年を迎えました。いつも雲州堂へ集まり、楽しい時間を演出してくださる皆様のおかげで14年間続けてくることができました。ありがとうございます。collective設立時、自分は24歳だった。という事実が気づいて、本当にいま目眩がしたところで、パーティのグルーヴは年々増して成熟したものになってきています。まだまだ深い味わいに変化しそうです。もしよろしければ、これからもう一緒に楽しみましょう。

遠藤周作

『わたしが・棄てた・女』

(講談社文庫 1972年)

楠田行展



この小説は今から7年前、旅先

で出会った友だちに「遠藤周作ならコレが面白いと思う」と教えてもらったことがきっかけで読んだ本です。7年前の2011年といえば東日本大震災が発生し、世の中の価値観が崩壊した年。僕は当時、勤めていた会社に退職願を出し、三度目の就職口を探していました。就職活動をしながら奈良県内の図書館巡りをしていた時、か薦められるがまま自宅からほど近い田原本町立図書館まで、本を借りに行っただけを覚えていてます。

『わたしが・棄てた・女』の主人公は、大学生の吉岡努と森田ミツという田舎くさい少女の二人。あらすじはタイトルが示す通りです。あることをきっかけに出会った吉岡とミツですが、吉岡は2回目の逢引きで彼女の操を奪い、ミツはことあるうか、その晩に捨てられてしまいます。物

語は冷徹な男、吉岡が過去を述懐するかたちで展開するので、カラリとした彼の冷たさが小説全体に広がっている印象を受けます。

一方、純朴で無垢な性格のミツは、吉岡に捨てられながらも彼を信じ連絡を待ち続けますが、彼女にはさらに過酷な運命が待っていました。読後感には暗く寂しいものがありますが、どんな目に遭遇してもなお、人に愛情を注ぐミツの優しさや素直さ、そして人間臭さが読み手の心を強く揺さぶる小説で、寂しさと同時に「理想」という別の感情を思い起こさせる名作です。

作品に出てくる「人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すということなのか」という文章は、僕がこの小説のなかで最も大切にしている言葉です。言われるまでもなく当たり前のことではありますが時折、その視点に立てなくなるころがあります。

感傷的になっていた7年前、僕の心を灯してくれたこの小説。以来この本は、生活環境や人間関係における心境の変化など、それまでであった自分のなかの価値観が崩れた時、心の立て直しを図る時に決まって読み返す一冊でもあります。

この小説を薦めてくれた友だちを含め横切る全ての人に感謝を込めて、お薦めの一冊として紹介させていただきます。

江利チエミ/チエミの民謡集



キングレコード株式会社 (1958)

collectiveで回を追うことに「プレイ増加中の昭和歌謡。個人的には昨夏からラテンに傾倒した日々。そんな状況下、ご紹介するのに丁度いいのが江利チエミ。昭和戦後復興期を文化的に牽引した美空ひばり、雪村いづみと共に三人娘と呼ばれた歌手。三人娘主演の映画も多数作られました。YouTubeでたやすく後追ひできます。いい時代ですね。歌、踊り、そして芝居でさえも一見するだけで完全に魅了されます。その江利チエミ、沢山のリリースの中でも見砂直照率いる東京キューバンボーイズが手がけた民謡×ラテンの本作を推します。収録曲のうち「おてもやん」「木曾節」はYouTubeに映画の中で歌われたものがあるので比較されると二度美味しいのでは非和マンボ古典の「串本節」は菊地成孔が小田朋美をフィーチャーしてカバー。民謡×ラテンのスタイルを前面に打ち出した現行バンドとして民謡クルセイダースのカバーもチェックしてみてください。(YU)